

第一回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。おかげさまで全国から二六四名、五十二篇の作品が寄せられ、たいへん充実した選考となりました。応募者の最年少は一三歳、また一四歳の方も五人、さらに高校生の応募も多く、また最高齢は八三歳と、青少年から高齢者までひじょうに幅広い層からの御応募をいただき、豊かな賞となりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会選担当による第一次子選、第二次子選が行なわれました。それから選ばれた作品を対象に、河林満、池田康、五十嵐勉の各選考委員により、第三次選考、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

なお、今回は特別にファミリー賞を設け、その価値ある創作活動を賞揚させていただきます。詳しくは選評ならびに作品発表を御覧ください。

「文芸思潮」現代詩賞の授賞式は、入賞詩作品の朗読を含めて二〇〇六年一月二九日午後二時より日本出版クラブ会館にて文芸評論家・富岡幸一郎氏の講演とともに行ないます。ぜひ御参集ください。

なお、奨励賞および賞に漏れた作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんあります。それらの作品は、順次「文芸思潮」または「文芸思潮」ウェブに掲載させていただきます。御期待下さい。

第二回「文芸思潮」現代詩賞は明年二〇〇六年も今年とほぼ同じ要領で募集を行います（締切は五月三〇日とし今年より二カ月早くなりましたので、ご注意ください）。どうぞ奮って御応募ください。

選評

現代を突き破る言葉を

五十嵐 勉

第一回「文芸思潮」現代詩賞に、二六四人、五十二篇の詩作品が集まったことは大きな喜びだった。最高齢は八三歳、最年少は一三歳と、応募者層の広がりもうれしかったし、高専の文学愛好会でまとめて応募してくるなど、中学生、高校生の応募が多かったことも今後を期待させた。



この選考を通じて、収斂された言葉をとおして多数の人々への回路を求めようとする強いエネルギーが渦巻いている実感を得た。特に若い層の間に、鬱屈したある種の力があり、憤懣や不安や混迷がうねっている感を強くした。生きにくい社会になっていること、そのために心が傷つき、内面の鮮血を流して、ときには自殺まで追い詰められている実相が言葉をとおして伝わってきた。しかしこうして詩の言葉に託して、叫びと抗議をあげること自体、そのエネルギーはまだ健在であること、それがゆえに人間の内的な力は衰えてはいず、希望があることは確信できた。

人間が内的な力を失ったとき、復興や復権は存在しない。まず内的な力を整え立てることが、建て直しの第一歩だろう。文芸の役割、詩の役割は未来への回路として重要な働きを持っている。その意味で、呼びかけに込めていただいた作品群は、期待した通りのものであり、言葉の一つの高次の機能を十分に保持していたものだったことを、喜びとともに報告しておきたい。

詩は作品の結晶性とともにごとに高さと広がりが必要される。詩が高度になれば、言葉の凝結性と普遍性がより強く求められる。練度と技術性も、あ

第一回「文芸思潮」現代詩賞

当選 「青」「刻印」「羽化」 山下奈美
 当選 「艦影」「いんたあなしよなる」 川畑和嗣

優秀賞 「昼の光に漂う生を」「虹のかなたへ」
 「夢の中の戸棚」 佐山広平

「果汁」「ポーズ pose or pause」
 「メデイア」 一条千河

「ある臭い人間の日常」
 「甘いくちびる」「目線」 野澄れんな

奨励賞 「十七歳」「言・動」「冬の少女」

ほおつき 朴月あゆか

「バイカルチュラリズム」「ゴミ箱」

「節分」 左古善嗣

「正義の結末」「力」「発見」 散文屋幻太

「遠く」「昨日の小舟を降りて」

「僕は歩行あるしている」 中村和夫

「ありふれた交点」「雨の匂い」「祈り」

雪風

「黒」「光へ」「闇の中へ」「奇妙な果実」

のあな やすみん

ファミリー賞

詩 「あなた」「祖父よ」「母よ」

エッセイ 「祖父母」 澤井すず

小説 「母鳥」 澤井ひろ

る程度のレベルになればどうしても必要になってくる。動機や思いはひどいように強いものが多かったが、この練度や凝結性の面では、全体としてまだ不十分な感想も抱いた。第三次予選の通過作品が少なかったのは、その理由による。詩はまず強い思いが第一だが、それにプラスして凝結した結晶度の高い言葉と、叫びを輝きに変える普遍の変換が、技量として必要になる。この練磨がまだ十分になされていないように思った。

またタイトルも全般に詩の題としてはあまりに乾燥した味気ないものが多く見られた。現代的な言葉を使えば今風の詩になると考えるのは間違いだし、思慮が浅い。現代に追随するのではなく、現代を突き破る言葉がほしい。タイトルも詩作品の一部である。工夫していただきたい。

ちなみに、第一次予選は、ある程度詩の言葉になっていくかどうか、他者に詩として呈示できるレベルになっているかどうか、もうひとつは、ある個人の強い思いがそこにあるかどうか、何か伝わってくるものがあるかどうか、選考の基準になる。どちらかがあればよい。何人以内、何篇以内ということではない。全員がそのレベルなら、全員が一次予選通過ということもあり得る。

第二次予選は詩の言葉の結晶性がより高いものが選ばれる。あるいは思いのさらけにいつそう強いものが通過する。三次予選はさらにその方向が高度に求められると同時により普遍的な広がりや高さが要求される。言葉の音感的調へも加味される。

こうした選考を経て、最終選考に残った作品はある程度これらを満たすものだった。なかには詩の技量に不足はあるが、そこに漲る思いの強さだけで上ってきた作品もあった。

当選作、山下奈美氏の「青」はこれらの点で秀でていた。言葉の結晶度は集まった作品のなかでは最も高いものであり、青い色と悲しみの深い澱みと還ることのない過去への哀惜に、生きることの一回性の魂の震えが伝わってくる。この詩才を賞賛するとともに、山下氏には、現代に流行る小市民的な詩世界に満足することなく、今後さらに、スケールの大きい、深さと高さを兼ね備えたより普遍的な人間の魂の詩を生み出していつてくれることを期待したい。

もう一つの当選作川畑和嗣氏の「艦影」は、「いんたあなしよなる」との組合わせでより社会性を背後に色濃く宿した作品として評価された。社だけである。しかしそれにもかかわらず胸を打つものが強くあったのは、誠実な生き方そのものから来る深い力が備わっているからだろう。澤井かず氏はエッセイ賞にも応募され、「祖父母」というやはり家族を題材にした作品を提出した。また澤井ひろ氏は母親の立場から「母鳥」という小説を銀華文学賞に応募された。ここには連環した母子の生き方と文学行為があり、賞場に備する。ファミリー賞を贈り、作品をいっしょに発表させていた。

遠い呼びかけの熱の重さ

河林 満



本賞には多数の応募作品が寄せられたが、それぞれ力作であった。小説大流行の現代において、詩の有効性は必ずしも明確なものになっていないとは言えないと思えるのだが、私なりにうがって言えば、散文へと孵化される卵のようなものと、卵のままゆるぎない自己完結を持つ言葉の宮殿のようなものに分かれると言っているだろうか。家族や社会という日常生活に材をとったものと、夢想やため息という個人のひそやかさそのものに材をとったもの、さまざまであった。

その中で、山下奈美の「羽化」は、達者な手馴れた言葉を束ねて当選作となった。私にはどこかで見たいような既視感があって、作者の主題に十分たどり着くことはできなかった。しかし、他の委員からの圧倒的な支持を受け、受賞となった。おめでとうございます。

次に、川畑和嗣の「艦影」は、戦争の記憶ないし風景が現代に揺曳している、秀作だと思われた。南の国の海の民、赤道直下の強烈な日差しにこわばり果てる軍艦。作品の言葉は私の中に新しい言葉を産み落とすと感じられた。さらには、「いんたあなしよなる」、もう古い記憶に溶けていく若者たちのある世代の政治の季節。どこか死語となってもその死の膜をはがして立ち上がるのが人間の、人間というより生命の業なのだ、まさに遠

会の影を引き摺って、それが詩の陰影として彫りを深めている。拒否しながら、なおかつ脅かされる社会からある悔いの残像を、歴史の時間の中で裸にされる自身の自分と照応させながら、しっかりと刻印している。

優秀作の野澄れんな氏の「ある臭い人間の日常」は、言葉の快い展開のうちに、むしろ内向の肌触りが温かみを持ってひろがっていく。「活字はいつも美しく、涙が出るよ、指でなぞりながら選んで、愛しいよ」という部分には作り物ではない真情が伝わってきて共感できた。やや色彩感覚に乏しく、モノクロの写真を見ているような気がするが、逆にそれが内面を滑らかにし、内向的味わいを深めているとも言える。

優秀作、佐山広平氏の「昼の光に漂う生を」は、詩の技巧の面では最も豊かで、すでにかなりの詩作を重ねてきた年輪を感じる。「夢の中の戸棚」も、新しく感じられるスタイルで、おもしろい。すでに七一歳という高齢だが、みずみずしい詩心を感じる。豊饒な詩作世界に拍手を送りたい。

二条千河氏の「果汁」「ポーズ」はストーリーの造形性を帯びた作品に他の選考委員が注目した。自分に向ける刃の鋭さに、肉体の奥のドラマを触知させる問題性を孕んでいる。しかし、構成的に型にはまろうとする強さと弱さを併せ持っているところに、詩の結晶性を邪魔するものがある。この点を生かすならば、二条氏は小説や戯曲など別の形式に向かうべきであろう。むしろ小説などをしっかり書くことによって詩も同時によくなくていく可能性を感じる。小説に才能を生かせそうなのは、野澄れんな氏にもあてはまる。

奨励賞では朴月あゆか氏の「十七歳」の透明感のある作品、中村和夫氏の「僕は歩いている」などの遠近に富んだ歷程感覚の深い作品、また、のあなやすみん氏の自己の内部に反響していくような作品に注目した。

賞には漏れたが、栗山愛氏の「晦冥のコスモス」の被破壊感、鈴木健規氏の「ひかり」に見られる清澄感、末永逸氏の「クリスタル」に見られる鏡像感覚など印象に残った。在上水悠氏は「つばき」一作で最終選考にまで残った。力を感じるので、ぜひさらに詩を作る行為を続けていつてほしい。

今回澤井かず氏と澤井ひろ氏の母子にファミリー賞を贈った。澤井かず氏の詩は、言葉の技巧はほとんどない。心情を真っ直ぐに告白・吐露する。い呼びかけの熱の重さをはらんでいる。「もつと生きたい」といううめきが、うじゃやけた日常を突き上げる。

作者が自らの到達したテーマに触れて書き始めるもよし、あるいは未到達のテーマに向けて書き始めるのもよし、詩の有効性の膨大な未来を引き続き銀華文学賞へと、欲望を抱くものである。

無二の固有性へ

池田 康



今回選考にたずさわることになり、評価という仕事の難しさとまどうところ少なくなかった。

当然のことだが、詩は一にも二にも読まれるためのものであって、評点をつける対象として元来あるわけではない。比較評価という特殊な目的意識をもってよく書いているかどうか判定しながら次から次へと読んでいく読み方は詩を読む本来の読み方ではないだろうし、そういう読み方に対しては詩作品が本来の姿を現さない場合もあるかもしれない。詩人が詩人として認められるのは基本的にはいい作品を書くという当たり前の事実によるはずだが、作品のよさを測る一本の物差しがあるわけではない。作風は様々であり、個人の進展の結実としてのその多様さをそのまま祝福するという平穩無事の花園を離れて、ある限定された土俵で明確な序列を決めようとするとしち面倒なことになる。天下公認の一本の物差しがない以上、判定者の好みという「とある一本のかなり怪しげな物差し」が持ち出されることもある程度やむを得ない。それでもなるべく公平に評価しようとするわけで、そうなる、作者がどれだけ自分の詩の言葉を無二の固有性へと研ぎ澄ませているか、詩という料理に自分の生を煮詰めてつくったダシを利かしているかの度合いが作品の底力となつてこちらに迫ってくるのを静かに感受するほかない。その点、当選作の山

下奈美さんの作品は、典雅によくまとまっているというに留まらず、自分の詩言語に注ぎ込む丹精と祈念が一行一行にいきわたり、己の生の核心部分を詩という表現形式に奉納し意識的に詩を生きようという覚悟のようなものが強く感じられ、姿勢の追求のレベルで頭ひとつ抜けている印象をもった。「刻印」、「羽化」、「青」、いずれをとっても修辭のきびしい縛りから切なる思いがほとぼしり出ている。

川畑さんの作品「艦影」はやや謎めいた部分を残しながら文明の運動の盛衰をほんの数コマで捉えようとしており、素描的映像の間に或る民族の或る時代を襲う巨大なげもの影がほの見えるようで一瞬の戦慄を覚える。また「いんたあなしよなる」は二つの人生の交錯の悲哀を、面影のジ

グズーパズルの「まなざしのピース」という巧みな表現を軸にして詩行の中に立体化し、ねじれる生の苦さをあざやかに描出している。

優秀賞の二条さんの作品では、「果汁」の端正な抒情もさることながら、「ポーズ」における説話語りのうまさ、滑らかさ、リズム感に、コトバ操りの秘術を体得する異才の存在を感じた。次なる作を読みたい、この人の作品集なら手にとってみたいと感じさせる魅惑の匂いを持った詩篇である。

佐山さんは老いてなおみずみずしい詩魂が、野澄さんは苦悩をぶちまける切実さが、強く印象に残る。

選考委員紹介

河林 満

かわばやし みつる

1950年福島県生まれ

中上健次に師事

90年「渇水」で文学界新人賞・芥川賞候補

他に「殺雨」「黒い水」「年譜」「海からの光」など

詩集に「風景その呪縛」がある

池田 康

いけだやすし

1964年愛知県生まれ

名古屋大学大学院文学研究科修了

詩集「ロマンツェ」1994 詩集「星を狩る夜の道」2005

詩集「星を狩る夜の道」で文芸思潮詩人賞受賞

戯曲「御曹子のピクニック」「エチュード★BAB

EL」など数篇

五十嵐 勉

いがらし つとむ

1949年山梨県生まれ

早稲田大学文学部文芸科卒業

「流滴の鳥」で第2回群像新人長編小説賞受賞

「東南アジア通信」「アジアウェブ」編集長

「緑の手紙」でインターネット文芸新人賞

現在「文芸思潮」編集長

「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」を連載中

第一回「文芸思潮」現代詩賞 当選作

山下奈美



受賞の言葉

山下奈美

受賞作はアメリカ生まれです。応募締切が迫ったころは帰国を控えており、段ボール箱の谷間で推敲したのを覚えています。

あれから二ヶ月。ようやく日本でアパートを借り、引越し当日にとびこんできたのが、「文芸思潮」現代詩賞受賞のお知らせ。そばで荷物を片づけていた夫が、真っ先に「おめでと〜う」と喜んでくれました。

詩は中学時代から書いていますが、投稿をはじめたのは七年前。当初は、イメージ先行や独りよがりの詩になりがちで、試行錯誤の末、ようやく何が形になりかけてきたと思います。

私の詩には、事象を真正面から詠んだものと、なじまない衣服に袖を通してしまったような、我ながら多少もてあます作品があり、今回では「青」と「刻印」が前者、「羽化」が後者にあたるとしよう。作風の違いはあれ、「異国」と「脱却」を共通テーマに、三編を応募しました。

「羽化」は、内省の過程を視覚化し、それを詩にしたチャレンジ作品です。ただ、強い感情に筆力が追いつかず、モチーフを盛り込みすぎて雑然となったのが反省点です。一方で「青」は、渡米直前の実体験をもとに、最も気合いをこめて書いた自分らしい詩です。私そのものといえる「青」を評価していただいたことは、何より励みになり、自信になります。

青

青に導かれて
ゆきあたる路地には
わたしを司るかなしみが在る
それは言の葉を持つまなざしに似て
わたしの瞳のふかく ふかくに沁む
紫陽花となる

ああ青が降りている
もはや声も届かないほど
隔たつて久しいだけかの
だが今でも
怖いほど鮮烈なだれかの
泣き濡れた笑顔のように

銀色の雨の
降りしきる軒下で
青は地力を吸いあげる
懐かしきものは
それゆえのするどい刃を秘めながら
したたかわたしにたち還る

それは
異国に発つ二十日まえの午後のこと
わたしを浸食した青は
やがて脈打ち息づきだし
きのうの日付に
限りなく叫ぶ穹となる

選考会風景



羽化

あのひとの死んだ夏の終わり
立ち枯れた向日葵の花がどくろに見えた
放水で
刹那の虹の橋を架けながら
まばゆい影のうしろに溜まる
昏い光の海を見た

この街を
とうに着古した少年のように
わたしはどこかへ去りゆきたくて
わたしを抱く 黒い巨大な葉の下で
遠くも見え 近くも見える
逃げ水をとらえようかと
助走の瞬間をはかりだす

灼けつくトタンに
繭のように守られていた
記憶は今も
その体液に熱をはらんで
血濡れた産声でわたしに触る
他人行儀な明日に焦がれて
見知らぬ獣が
烈日の路地をすり抜けた
うなだれた影は もはやわたしに届かない
せめて最後に
とびきりの花言葉たばねて
ふりむきざま
あのひとの溷れた胸もとに
あつけらかんと投げつける

ところで先日、夫がこんなことを言いました。何を書いても、おまえの作品には、おまえを育んだ風土の色がする——と。風も陽ざしも尖って、どこか乾いた町の色。今回の受賞作は、活字になってから読んでもらうつもりですが、やはり同じ感想が来るのでしょうか。二年間にわたる海外生活で生まれた作品が受賞し、嬉しいしめくり、そして祖国での嬉しい再スタートとなりました。本当にありがとうございます。

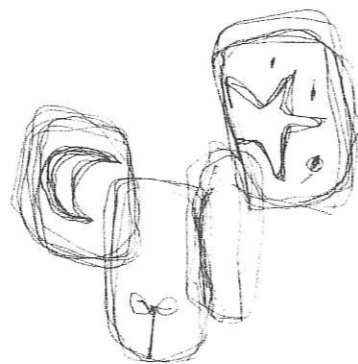


刻印

わたしは
あるひとの歳をかぞえて生きており
わたしに刻まれる歳月の
彼らには痕跡ひとつ残さぬことを
どうにも解せず風に問う

頭上には 大国を生んだ空の青
それを仰いで
わたしが指を折るかぎり
彼らも生の裏側を生きている
わたしはおそらく
溺れているのだ
わずか生きては 生きすぎたと
足を止めては ここに在ると
フィラデルフィアの風の香を吸いながら
わたしだけに刻印を打つ
彼ら自身の歳月のなかで

わたしは
あるひとの歳をかぞえて生きており
ふと指を折ることで
彼らをわたしのなかに
抱きしめる
抱きしめる
石畳の馬車道に
あふれ出すほど抱きしめる



やました なみ

1972年生れ 静岡市在住 主婦
津田塾大学学芸学部英文学科卒業
静岡県立佐久間高等学校勤務(英語科)
97年 同校退職

第4回風花随筆文学賞/最優秀賞
第7回小諾・藤村文学賞/優秀賞
第4回羽生ふるさとの詩/最優秀賞
第4回酒折連歌賞/大賞
第21回 ニッサン童話と絵本のグランプリ/大賞
など受賞歴多数

川畑和嗣



受賞の言葉 川畑和嗣

この度は、拙作に過大な賞を頂きまして、有難うございました。

「艦影」は三年前に亡くなった伯父の話に着想を得たものです。多弁ではない伯父が時折語る思い出は、その言葉の少なさゆえにかえって、鮮やかな光景となつて、私の胸に残りました。

いずれは、ゆつくりと話を聞きたいと思つていたのに、多くを語らないまま、旅立ってしまった。志願兵だった伯父は、最後に「戦争はいやだなあ」と洩らしたそうです。

「いんたあなしよなる」は、大袈裟に言えば、戦後の自由と見えない戦争の中を迷走した旧友の青春時代の風景です。

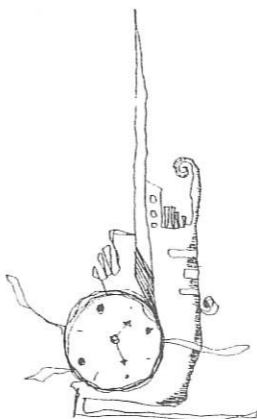
時は巡って、戦前とも言われる非常時の今日、危うい時代の空気の中で安直な反戦平和論に流されない堅固な骨のある本づくりをされている「文芸思潮」で第一回目の賞をいただいたことを本当に感謝しております。

艦影

晴れ狂った朝の南
似たような昔
沖には軍艦が屹立していた
朝の太鼓と踊りを忘れた人々は
燃え盛る轟音の
異形の彫像にふるえていた
波に溶けた黒い軍艦
嵐に落とされた
パイアのように水兵の
頭がいつばい浮かんで
いたと聞く

バナナの貢先を失った
南の民は
猿を肩に鍋を洗い
ふたたび欠伸のながい日を
化粧を塗りあい過したという
流れ着いた信号旗は
首長の腹に飾られた

晴れ狂った似たような朝の日



いんたあなしよなる

あぶら蟬が死ぬ夏には
小さな野辺おくり
遠ざかってゆく
ヘルメット姿の友

それは色あせた ジグソーパズル
悲しげに たずね求める
まなざしのピースだけが
見つからない

嘘だらけの履歴書
スーパードから
自然食品を盗んで
逃げてゆく君は
昔 血と肉がべとつく広場で
機動隊に殴られていた

日照り雨
すきとおる杉林
秋風の 銀杏

君は深夜の古書店で
古い背文字の本を開き
精密な天国の地図を示し
自分の住所を
ハッキリと言いあてた

争いのあるところ
それが君の故郷
砂をかじる
魂の戦場で
君は 旋風に奪われた
洗濯物のように
吹き飛ばされたかった

私は命を惜しむか
もっと生きたいと
狂い声をあげるか
責めているが せめられている

熱病は覚め
理想は必ず腐る
と せせら笑いと
私はたった一人の友
を裏切った

競馬新聞をふせて
君との距離を知るランチタイム
会社の屋上で 私は
君から盗んだ
まなざしのピースを
ゆつくりと ふみつぶした

かわばた かずし

1956年 北海道生れ 北海道在住
会社員を経てイラストレーター
として独立
中学の頃から詩作を続ける
父は元特攻隊員
「詩人会議」「鹿児島知覧『平和
へのメッセージ』」その他入選
多数
第一詩集「N日記」
第二詩集「夜会服」

昼の光に漂う生を

ゆれて、ゆれて、ゆれる風景
人が群れているのは
人が死んだためではない

おびただしいきらめく光が、エメラルドの光
る車が、白い笑いに溶け、ざわめきが溢れ、
人は群れ、透けて病み、青い空の凍る軋み、
眼は白い影を眺め、泣き声を聞く

あるいは、眩きが、夢のかぼそい世界の、呻
きの底に、埋もれた顔のおくに、遙かな論
理の木の梢に、あやうげにいる鳥、墓石に
触れ、肌の跡を残した、求めあう掌、愛撫
の渴き、蔽われた地のしたに、奈落に消え
る声のとき、率いる愛の論証に人は賭ける

鳥の囀る新緑を少女と歩いた
夢に傷ついた驕りの日
ぼくらは草の匂う光のしたを
稜線を瞳める意識のなかで
教科書の滲むぼくらのくちづけ
そのとき
世界は血に塗れ
ぼくらは愛を失いはじめた

陽が沈み

空が悔恨を流したとき
ブラット・フォームのうへでだれかが死んだ
林が知の色に濡れたとき
舗道のうへでだれかが死んだ
苔が空気を求めたとき
風景が描く軌跡のなかでだれかが死んだ
秋が匂いに染まったとき
ビルディングのなかでだれかが死んだ

甃のうへに臥した死骸
空洞な胸に

腥い臭いがする記憶の世界
状況が突き刺さってくる
風は吹かない
湿りはない
そこには
死はない
情念は溢れない

風が記憶を梢に結ぶ日
豊饒な愛を求めあうぼくら
ぼくらの指が思いに傷んだ停車場
遠ざかる車窓の
光に煌めく軌跡の先に
世界は概念を投げかけ
ぼくらは愛を失いはじめた
人が群れているのは
人が死んだためではない

虹のあなたへ

虹のあなたを歩いていく
速い過去にあるような
近い心にあるような
揺れることはない冷やかな
景色のなかにある
林のなかにある
畦道のなかにある
虹のあなたを歩いていく
忘れた世界のなかに
薄い霧の湿った厚い葉をぬけてきた光の乱れ
に
萌やしはじめた愛
水族館のむこうの
触手のとどかない水槽のむこうの
明るいきらめきの砂地の上に
忘れてきた閃きがあつて
メルヘンの箱があつて
虹のあなたを歩いていく

風に靡いているのではない

煙があなたに流れて
結晶した青い空のなかに
結晶した青い空のしたに
ほそ毛が乱れていて
陽が戯れている細い細い皮膚
そこに、玩具の世界があつて
そこに、あなたの世界があつて
薄いガラス箱の世界があつて
虹のあなたを歩いていく

赤い、白い、藍色の珊瑚のまへに
痛々しい岩面の海辺に
肌を裂くような断層の下に
黄ない緑の草原のうへに
ぼくが立ったとき
ぼくのまへで世界は溶ける

そう、あのころあつたぼくのひとつの宝、葉
の花のような、煌めく朝
嬉しくって、そして哀しくって、ぼくの生命
がはりついた木の葉
隕石が落ちていた荒地の穴、鋭い風の吹く
洞穴
幽かな匂いのゆれる墓の下、色彩のいつも映
えていた、しみるような目の色の昼、ぼくが
濡れていた夕暮れ

虹の色の断層のなかに
含まれて水滴がある
白い歯の微笑みがある
と
宝石店はいつか遠い閉店をしていて
ぼくの目は貼りついたまま
時間の結び目をもとめるため虹の麓へいく

夢の中の戸棚

——ぼくのまったくあほらしい夢——

詩のことばかり考えて眠ったので、こんな夢を見てしまった

夢のおくて

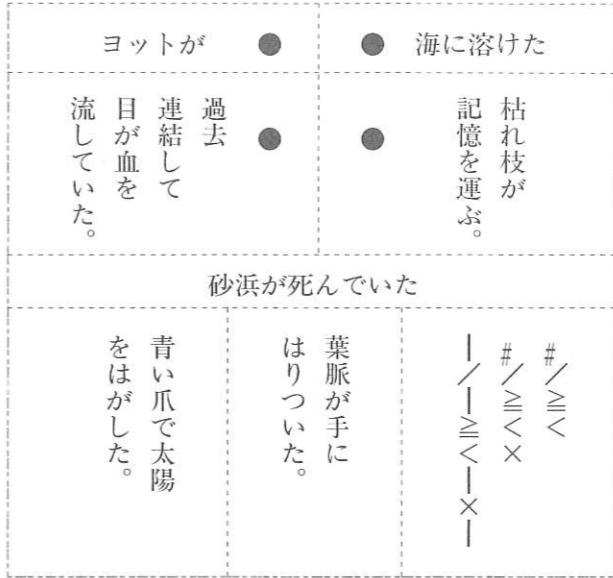
親しい男がぼくの夢を
睨んでいた。

刺の先

——昨日も地獄、今日
も地獄、明日も地獄……
ずっと地獄——

ぼくは喜びが溢れて、
皮膚から零れおちた
ああ、光

いっぱい占めて語っていた。



「この線が美学だね」と、ぼく、
「なかなか……でも奇妙じゃないか」と、Y教授、

「過ぎた思い……愛かな」ぼくは言葉を呑みこんだ。

「言葉とは何だろうか」

「あの詩人がこんな詩を書くはずがない」

油田のような、玉虫模様のような、うすい光のある、
かすかに紫色の光る、まだらな黒い原油のある、ス
テンドガラスの色模様の、ぼくは空中に浮いて、黄
あげは蝶を追いかけて、幼いぼくはぼくだけの世界
で、この世界に入っていた。

ぼくのなかにはあほらしいような夢があつて、
珊瑚の冷たい肌に触れる時間の美を数えると、
少女たちがぼくに微笑みかける。
砂漠の砂粒を数える夢があつて、
それは幽かな気配があつて、
長い橋の、ものでない橋の、
それでいて、触れると痛い感触のある橋の、
鉄柱をかぞえる夢があつて、
だから
いつからかぼくは、指先に
毒きのこの匂いを染めている。

入賞の言葉をいただいた時、ただひたすら驚いていた。それは認めて下さった方がいるという喜びは無論大きなものであったが、それだけでなく、表現による言語の質への問いかけに逡巡しながらの僕自身の創作の彷徨いに、切れこんできたかのように思われたからだ。

僕自身、青春期にはただ意識や心情の叫びのままに詩を書いていたが、しばらく経った時、多くの人々も問いかけざるをえなかったように、定型詩から自由詩へ移った時の、すなわちアウターリズムを捨てた時の言語の質を考えるようになっていた。そして、『英詩の構造』（新倉俊一著・駿河台出版）の著書も述べているように「今日では、詩を韻文か散文かで区別することはほとんど意味がなくなっています。その代わりに言語の機能の違いによって私たちは詩とそうでないものを区別する」という、言語の機能の違いに拘りはじめた。そうして独断的言語表出に自己投身しはじめてしまった。

しかし、一方心情への沈みこみからリカルに言語表出することが、僕自身の意識や心情と表出が重なりあっている実感を感じざるを得ず、揺れ動き彷徨い続けてきたその軌跡に切れこんできたのである。

受賞の言葉としては、ただ嬉しいとそれのみを述べるべきかもしれないが、これからも、彷徨

徨いつづけていくであろう自己への確認として、この抄文を綴ることになってしまった。

さやま こうへい



1934年生れ 無職
菓子問屋の丁稚小僧、手作り飴の職人見習い、印刷工場の工員の間、愛知県立瑞穂高等学校定時制に入学し卒業
国立愛知学芸大学卒業
愛知県立高等学校の教諭として六校を歴任
退職
趣味の陶芸において五回の個展と一回のグループ展を行なう
詩集「散乱する實在に」小説「華やいだ虚無を求めて」

野澄れんな

ある臭い人間の日常

情報の渦に飲まれている
 今日も古本屋で安い本を買いたため
 活字を追いながら 生きてる価値を
 美しい配列の中に求めて

私は腐敗して臭くて
 大人はそれを知っていても知らないふり
 そんなことないよって友達は嘘をつく
 (それを優しさと受け止められる余裕がない)

病院の先生らも そんなことで来られても
 困るって 呆れた顔で私を見るから
 通りすがりの子供に臭いと言われて
 どこか遠くで失笑している誰かに対する不安
 どうすれば私が私から解放されるのか

随分と何度もばからしい夢を見て
 ただ そこにいるだけで
 誰にも迷惑かけないのっていいな
 なのにみんな愚痴ばかりいう

贅沢な事情をたくさん並べて

とがった口元は醜い言葉を吐き出して
 なのに臭くないのね

臭い物をたくさん食べても臭くならない多く
 の人たちが不思議でたまらない
 私は臭い物を食べないようにしていても臭い
 のに

そんな日々の中でこの汚いのは私の方で
 だから体中から臭気が漂っているに違いない
 と結論づけた

私はもう生きていけない気がするのだよ

風がやさしくて カーテンが肌を掠めて
 開いた本の 中に入り込めば 決して誰も邪
 魔をしない

活字はいつも美しく 涙が出るよ
 指でなぞりながら選んで 愛おしいよ

ここで私は完璧な形を作ろうとして
 たくさんの嘘をくつつけていく
 決して裏切らないはずの言葉は
 もう私なんかをずっと飛び越えて
 気持ちいいところに行ってしまった

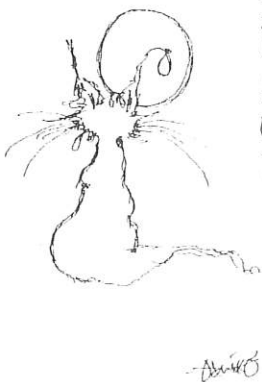
私のこのころのずっと深い部分にある幸せは、

たぶん誰にも分らない。だからどうかこの
 部分だけは私のものにさせてくれてもいいで
 しょう。小さな隙間を見つけては、いやらし
 く突っ込んでくる。退屈しのぎに意地悪する
 お姫様はいつもみんなに愛されて。やはり結
 論から言いますと、腐敗している私は性格が
 ひねくれているに違いないのだ。だから誰か
 からも愛されないのだ。だからどんな臭くな
 って神様が与えた試練ってことにして都合よ
 くとりあえず救っておく

浴槽に揺れる陰の明暗

水に浸かって潤されて 私の嘘が開花して
 綺麗な世界にうっとり ところけて

結局なんにもなれない私は こんなところで
 ひとり たわごとをぼそり



甘いくちびる

一瞬触れたものは冷たくて
 ふきぬける隙間もなく

いますぐたすけに行くよ
 お気に入りのフリーズでじゃれあう
 スカートの影ふたつ

台風7号接近中
 いろんなものがざわついている
 浮き足だつてへろへろ
 涙の意味ははてな?
 感情製作症候群

足元から作られてる
 折れた標識ふみつけていく

恋を数式で示しなさい

放り投げたいもの数えて
 いけないことほどきれいにみえるから

影が盗んだ ふたりのひみつ

溶けた
 くちびる

ソーダアイス

この夏

あたしのこころ

彼女の

溶けた

一瞬触れたものは甘くて

受賞の言葉 野澄れんな

この度は素敵な賞をありがとうございます。「甘
 いくちびる」は道路に伸びていた沢山の影を見て
 て、影側にある世界を描いてみようと思ひ言葉を組
 み合わせる感じで作りました。

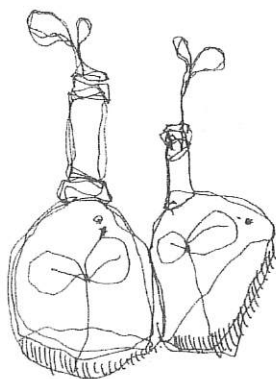
「目線」は(愛している)という言葉をイメージし
 た時に、すると降ってきた詩です。「ある臭い
 人間の日常」は、自暴自棄になりながら書いたもの
 で、私自身もう読み返すのも嫌な作品なのですが、
 この作品を評価してくださった方がいらっしやっ
 と聞き、少し救われるような気持ちになりました。

もともと才能のない私ですが、ずっと書き続
 けてきたことで、こうして賞をいただくことが
 出来ました。詩に限らずそれは多くの事に言え
 ることで、何かを続けるという事は必ず力にな
 るのだと実感しました。まだまだ足りないと思
 っていますので、これからも、もっと色々な言
 葉を勉強していけたらと思っています。今回、
 私のつたない作品を選んでくださり、このよう
 な機会を与えてくださった編集者のみなさまに
 感謝します。

目線

そのつま先
 かけがえのないものを指折り数える
 私には愛というものの順番がずっと後
 いつも地面をける瞬間の
 ジャンプする一瞬の
 そのつま先
 羽ばたこうとしている彼の
 背中
 きつちりと
 無駄なく
 美しい
 私にはもう手には入らない物
 それでもこの目で手に入れる
 決して触れることのない
 絵画としての形

若い女の子が遠くから彼を見ている
 そこには恋が散りばめられていて
 淡く切なく美しい
 もう手に入らない物
 私には愛というものの順番がずっと後
 「あいしてる」という響きも
 もう深く埋まって忘れてしまった
 蓋を開けるには力と情熱が
 秘めた想いは窮屈そうに
 ただそこに蹲っては



のずみ れんな

1971年秋田県生れ 在住
 会社員 独身 O型
 高校3年生ぐらいから詩を書いています
 好きな詩人——草野正宗、ワタナベカズエ、茨木のり子など

第一回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

二条千河

果汁

血は濃すぎるから嫌いな
 そう例えるならリングゴのような
 ほのかな香りの果汁なら
 傷口からつい目をそらす
 見えぬ手のひらの沸き立つ熱さ
 あふれ落ちていく赤い泥
 溶岩のようで嫌いな
 透き通っていてほどよく冷えた
 やさしく滴る雫なら
 ジーンズの上に満ちる潮
 波打つ鎖は素肌にくく
 舐めてもからくて咽るだけ

海水のようで嫌いな
 もつとすつきりと甘酸っぱくて
 軽くはじけ飛ぶ露ならば
 なくて困るのはわかるけど
 赤くて熱くて塩からくって
 重くてその上煩くて
 わたしはこの血が嫌いな
 入れ替えることがもしかなくなら
 リングゴの果汁をこの胸に

受賞の言葉

二条千河

まったくと言ってよいほど、詩が書けなくなった時期がある。社会人と呼ばれる立場になって一年目のことだ。一年間でたった四編。単純に、仕事を覚えるので忙しかったせいかも知れない。だが、当時は不安になったものだ。自分はこのまま散文的な人間になってしまうのか、とか、そのうち小説や脚本も書けなくなっていくのではないかと。幸いにも、それはどうやら一過性の現象だったらしい。

この時期の前後で、自分の詩は変わったのか。実を言うと、よくわからない。ちなみに、応募作の一篇「果汁」はスランブに陥る以前の、残りの二篇「ポーズ pause」と「メディア」は以後の作品である。改めて見直してみれば、自らの詩に対する距離の取り方が、どこまで異なる気のしないこともない。しかしいざにせよ、あのもどかしい一年間は、日常生活の中に詩が在ることのありがたみを知るといふ、それだけで充分な収穫をもたらしてくれたのだと思う。

今回、光栄にも、三篇の応募作を意外に高く評価していただいた。喜びと同時に噛みしめているのが、このありがたみである。

血も、それが象徴するものも、時間も、氾濫する情報も、不可欠なものは大抵、煩わしい。失われることがないからこそ、ありがたみを実感するチャンスもなく、永遠に厭わしい。言葉もまた、いつも煩いの種ではある。

とは言え今日ばかりは、単純に、言葉というものに感謝しておきたい。この荣誉にあずかることができたのも詩のおかげ、言葉のおかげだ。

同時に、審査員の皆様、関係者各位にも、この場を借りて心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

ポーズ pose or pause

まるでフォークを刺したパイ生地のような崩れかけのあばら家に雨宿り
老婆は囲炉裏に薪をくへ
客のために茶葉を煮る

炎も震えあがる風の唸り声
こんな夜は山越えに向かない
湯気に白濁する小屋の壁には
一枚の写真もなく

赤い毛糸のマントがひとつ掛かっているきり

この辺りは お独りで暮らすには少々
心細くありませんか？

ただでさえ薄暗い峠道

人影かと思紛うような形の岩が

ぼつりぼつり立っているのを認めるたびに

不気味に感じながら登ってきましたが

そう言えば この山には

恋しい人を待ちわびた乙女が

待ちながらその姿を石に変えてしまったとい

う

伝説があるそうですね――

作り話さと 老婆はつぶやく

それにしてもこの地方には

岩石に関する昔話が多い

山姥が美しい里の娘に嫉妬して

妖術で石に変えてしまったとかいう

民話も聞いた気がします――

作り話さと 老婆はつぶやく

それはそうでしょう

人は石にはなれません

石になって永遠に思いを残せるなら

一体誰がこの腐りやすい身体に甘んじていら

れるでしょう？

娘たちは 何百年も微動だにせず

苔むしてなお恋人を待ち続ける術を手に入れ

た

だとすれば

山姥が娘を石に変えたのは嫉妬のためなんか

じゃない

そうは思いませんか――

老婆は黙って項垂れている

石になりたいという

娘の切なる祈りに同情したのでしよう

このまま時が行き過ぎれば

戻らぬ人への思いはいつか揺らぎ始め

やがて諦めに膝を折る日が来る

娘はその瞬間を恐れて

己の時に休符を打ちたかったのです

山姥は娘に忠告をした
ひとたび石になったが最後、おまえはもう
たとえ思い人が戻ってきてても
その姿を見ることも

声を聞くことも出来なくなるのだと

でも 娘にとつてそんなことは

もうどうでもよいことだったのでしょうか

決然と頷いて その眼を閉ざし

ちようど山の向こうに心を馳せているように

美しい面を月光に当て

自らその立ち姿を決めたのです

残された家族は山姥を恨むはず

もちろん やがて戻ってくる恋人も

貴女はすべての責めを負いながら

風雨にさらされる石娘たちを

ずっと見守ってきた

そして今もこんな山小屋に隠れ住み

時折 道に迷って訪れる旅人に

こうしてお茶を淹れているのですね――

老婆からの返事はない

客の語る 長い長い戯言を聞きながら

いつしか寝入ってしまったようだ

そうそう、その壁にあるのと同じ

赤い毛糸のマント

あの人型の岩のそばに落ちていました

水気を絞って

掛け直しておきましたよ――

立ち上がってマントを手に取り

老婆の細い肩を包む

雨漏りがひとしずく

背中に落ちて息をのむ

こんな夜は山越えに向かない

囲炉裏端に腰を下ろし

空になった茶碗に

薬缶から白湯を注いで

片手に持ち



そのまま眼を閉じて

雨の音を聴いている姿勢で

ポーズを決めてみる

メディア

旅人よ

まずはその大きな荷物を下ろして
縁側に腰かけ お茶でも啜るといい
ひと息ついたら

語りたいたいものを語ってもらおう

それがわたしの聞きたい物語になる

話題に注文をつけるほど

外のことは知らない

この小さな町から出たためしなどないから

見知らぬ土地で見聞きしたことなら

何でもいい

語りたいたいものを語ってもらおう

わたしのことを別のどこかで語る代わりに

旅人よ

この町では思いもよらないような出来事が

よその土地では起こるものだね

旅人よ

この町も よその土地も

人のすることは皆 似通っているものだね

いいや 所詮うわさ話

半分信じて 残り半分は楽しんでるのさ

駅前ごとにコンビニエンスストアが出来て

かつては鞆いっぱいだった旅支度も

不必要になったのか

このごろはカラダさえ持たずに

旅しているのだね

ああ 確かにそれならノドも渴かない

お茶はわたしが頂こうか

身軽になったら

ずいぶんあちらこちらへと飛びまわって

たくさんさんのニュースを仕入れてきたね

まことしやかな話し方も巧くなった

けれど少しばかり

繰り返言が多くなったようだ

あまり忙しいと

誰に何を話したかさえ忘れてしまうのだね

この町で起こることはすべてありふれていて

お返しになるような話題もあげられないが

せっかくなのでくれたのだから

何でもいい

語るに値するものを語ってもらおう

いいや 所詮うわさ話

半分信じて 残り半分は聞き流しておくのさ

おや

自分で選べというのかい

わたしが今 聞くべき物語を



にじょう せんか

北海道札幌市生れ 在住

9歳から18歳までの九年間を千葉県船橋市で過ごす

小学校二年生のときに担任教諭から勧められて以来、小説・詩・戯曲などの創作を続けている

2001年 戯曲『ROBOTS』(新風舎)

2005年 詩集『赤壁が燃える日――』

現代詩「三国志」(同)